

ソロモン諸島で咲かせたソフトボールの`花`。 普及の最前線

文・写真 / 井上 栄 (青年海外協力協会)

第4回

道具が足りない



いづえ・さかえ / 1980年12月11日生まれ。愛知県出身。小学校からソフトボールを始め大学までプレー。卒業後は愛知県公立中学校に体育教諭として勤務。2007年に退職し、青年海外協力隊に参加してジンバブエ共和国(07年6月~08年3月)、ソロモン諸島(08年8月~09年12月及び10年4月~11年3月)に赴任。帰国後は、星城名古屋中での勤務を経て、公社・青年海外協力協会に所属して駒ヶ根青年海外協力隊訓練所に勤務。

4月に大きな被害を出した洪水から2カ月が経ち、ゆっくりに向かっていますが、少しずつ復興に向かっています。日本からも政府だけでなく、日本の方々と日本にいるソロモン人が協力し、支援物資がソロモンに送られています。洪水の緊急支援が落ち着いた一方で、私の中に生まれた心配事の一つは、ソフトボールの道具は無事だろうかということです。

そこで今回は、ソフトボール道具事情についてお伝えしたいと思います。6月号では、配属先の学校にソフトボール道具を借りて活動を開始したこと、参加者が50名を超えるようになったことをお伝えしました。人が増えれば増えるほど、私を悩ませたのは、道具の問題でした。しかし、この問題は、ソフトボールを開始した当初からありました。

ソフトボール開催のチラシを貼る少し前から、配属先の授業でもソフトボールを教え始めました。全員が初心者学校の授業ではあまり知られていない国、それも見ず知らずの私の手紙にもかわらず、すぐに返事をくれたチームがありました。太陽誘電女子ソフトボール部の皆さんが道具の提供を申し出てくださったのです。

しかし、手続きは順調に進んでいたものの、情勢悪化のためソフトボール道具がジンバブエに届く前に私が日本に帰国することになり、ジンバブエへの道具の提供はなくなってしまいました。どの国も道具が足りていないことは同じなので、ジンバブエにソフトボール道具を提供できなかったのは残念だったので、ソロモンで必要とする人たちに提供できることは、本当にうれしいことでした。公

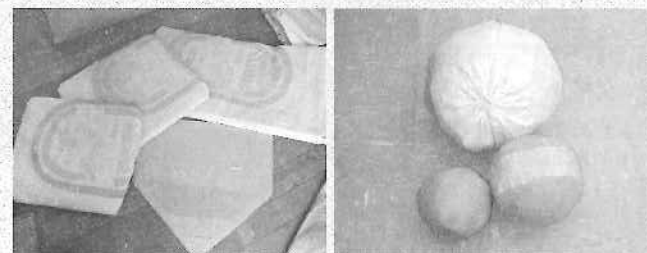


日本から贈られたベースをもって遊ぶ生徒たち(写真上)。太陽誘電の道具でプレー。しかし、選手の足元は裸足。個人での道具購入ができないことを物語る(写真下)

のお米に耐えられる耐久性があることから、お米がなくなるとこの国では砲として再利用されていました。そのためベースを作るのに必要な分の袋を集めるのも、一苦労でした。

が寄せられた物品を日本国内で募集し、世界へ届けるというものです。実は、ジンバブエでもこのプログラムを利用することを考えてソフトボール道具を提供してくださる人はいないかと日本リーグで活躍するチームに、勝手だとは思いますがお手紙を書かせてもらいました。当時のジンバブエでは、インターネットにアクセスすることが難しく、手紙を書くことにしたのです。日本

業では、グラブの使い方が分からず、みんなグラブの先でボールを捕ろうとします。正しい使い方を説明してもペラペラになっってしまったグラブでは、手が痛くてなかなか正しい位置でボールを捕ることができません。当時、配属先にあったソフトボール道具は、グラブ11個、バット1本、ボール1球程。これだけあれば十分だと感じる人もいるかもしれませんが、どれも長年使われていなかったこととソロモン人の恐るべきパワー、そして技術の問題のために、グラブのヒモは無惨にも切れていくということが多発していました。さらに、ソロモン諸島にはグラブを補修する革ヒモは売っていません。ソロモン人は布製のヒモで直したり、時には針金で直したりしていました。また、試合形式で練習するためのベースはもろろなく、ソロモンにある材料から作って使っていました。段ボール製のホームベースと米袋で作ったベース。余談ですが、この米袋、20kg



段ボールと米袋で作ったベースを2年以上使用(写真左)。ボールの数も足りないことから当然手作りだった(写真右)

募でのソフトボール道具募集には、多くの人が名乗りをあげてくださり、この提供を通じて、協力隊の活動が一人でも活動するものではないことを実感しました。ただ、道具がすぐに届くわけではありません。申請から到着まで約半年も時間がかかります。一人でも多くの人にソフトボールをやってほしいと願うものの道具が足りず、人が増えれば増えるほど順番を待つ時間が長くなるようになってしまいました。どうか道具を手に入れたらと思うものの、鳥国のソロモンは皮がとれる動物はいません。そのため、スポーツ用品店で売られていた輸入グラブは、本当に高価。私が見たグラブは、700ソロモンドルで売られていました。この金額は、この国の教員の初任給の半月分に相当します。

その後、在ソロモン日本大使館にも道具があることを聞き、グラブ6個、キャッチャー用具一式を借りることができました。50人の選手と使える道具は、これがすべてでした。学校の授業はどうかなるものの、休日のソフトボールはどんどん参加者が増えていきます。私の魚りは募るばかりでしたが、50人を超えてしばらくして、日本から無事に用具が届きました。今までなかったヘルメットや本物のベースが到着したことから大会をすることにしました。この初めての大会は、ソロモンらしさを感じるとも楽しいものでした。次回は、初めての試合についてお伝えしたいと思います。

同時に、市内のバス運賃が2ソロモンドルだったのですが、選手の中にはこの2ドルが払えず、練習後には1時間以上かけて家まで歩いて帰る人もいました。日本では、選手一人ひとりがグラブを持つことは当たり前ですが、ソロモンでは違います。選手たちに道具を用意することをお願いできないのです。

Information 派遣にあたって

派遣前訓練を無事に修了すると、いよいよ隊員は活動をする国々へ派遣されることとなる。日本政府が派遣するJICAボランティアには、①開発途上国の発展、復興に貢献すること②日本と開発途上国の友好親善・相互理解を深めること③国際的視野を養い育て、またボランティアの経験を日本社会へ還元することの3つが求められる。JICAボランティアは、時折「草の根外交官」と呼ばれることもあるが、途上国の人々と密接な信頼関係を築くために、途上国到着後は、現地語の語学訓練を実施する国も多くある。

HP / <http://www.jica.go.jp/volunteer>

ソロモン諸島 Solomon Islands
 首都: ホニアラ (ガダルカナル島)
 人口: 約53万人
 言語: 英語、ピシン語
 面積: 2万8,900km² (岩手県の約2倍)
 大小約100の島々からなる英連邦の
 一國で、4000もの集落が点在している。
 地理的にオーストラリアとの関係が
 深く、日本ともいろいろな面で友好を結
 んでいる。国民の大半が農業・漁業
 に従事しているが、近年は天然資源の
 開発で注目を浴びる。
